E L S P E E T　H O L L A N D

第２９回
ヨーロッパ・キリスト者の集い
証と感想

渡り鳥夫婦の”集い”
前ジャカルタJCFの松本章宏牧師から

私たちは以前からヨーロッパで日本語のクリスチャンリトリートが開催されていることを聞き、是非アジアでも行いたいと思い、昨年1月末から2泊3日バリで第1回アジア日本語教会ファミリーキャンプを開催し、10カ国から約80名が集まり、大変祝福された時を持ちました。いつかヨーロッパの集いに参加したいと夢見ていましたが、今年ついに実現することが出来ました。

私は今年3月に7年間のジャカルタJCFの牧会を終え、4月から「渡り鳥夫婦」と称して、中東とヨーロッパの特に無牧の教会を巡回して奉仕し、その最後に集いに参加するスケジュールを立てました。結果的に、そのようにして本当に良かったと思います。あちこちでお会いした方々と集いで再会し、さらに交わりを深めることができました。特に、今回、私たちも奉仕させていただいたエルサレムJCFから参加された方がいたことも嬉しいことでした。来年は是非ドバイJCFからも参加されるように、今からお勧めしています。

集いは、さすが29回も重ねられてきただけあってきめ細やかな準備がなされてきたことがよく分かる内容で大変感銘を受けました。施設も素晴らしく、大自然の中にありながらとてもきれいで便利な建物で、心身ともにリフレッシュすることが出来ました。一つ一つのプログラムも良かったですが、私にとってはやはり兄弟姉妹との交わりが何にも代え難く尊い時間でした。

25年前に札幌のOMF日本語センターで日本語を教えた宣教師の方々が今ヨーロッパで日本人伝道に携わっておられ、そのような方々と再会できたことは自分の人生を振り返る上でも貴重な体験でした。このような集いを企画し、実行してくださった皆さんに感謝でいっぱいです。

ちょっと背伸びした”集い”
シュトゥットガルトはAM兄から

今回は久しぶりに妻も一緒に参加させていただきました。

いつもはカメラマンとしてバタバタしているのですが、今回は代わりに「プレ大会の司会」と「代表者会議の議長」をさせていただきました。そのおかげで三女と過ごす時間がいつもより多くとれ、妻も２つの素晴らしいコンサートを心ゆくまで堪能することができました。

隣町まで一時間レンタル・サイクリングしたりする余裕もあり（ドイツでも夫婦でこんなことをしたことがないので！）良い思い出となりました。２つの初めてのご奉仕もぎこちなくさせていただきましたが、ちょっと背伸びをさせていただいたおかげで、新しい世界と可能性を垣間見た気がしました。冷やあせものでしたが、この事も終わってみれば良い思い出です。

今年も主にあって、豊かな交わりと恵みあふれる集いとなりました。実行委員の方々、託児にあたって下さった方、お話くださった先生方、その他多くの奉仕者と参加者の皆さんに心より感謝して。

地の塩、世の光

米国ミシガン州はJCFN理事の三上洋輔兄から

今年で新生から４０年、そしてオランダ駐在時の２０年前に幾つかの事を通して体験した信仰覚醒の思い出は、この８月２６日で還暦６０才を迎える私に、かねてよりライフ・ステージの節目としてオランダ行きセンチメンタル・ジャーニーを計画させ、オランダの皆さんが第２９回の集いを担当されると耳にして小躍りしました。

「地の塩、世の光」は私が約３３年間勤務した会社の社訓のバックボーンで、社訓は第三代目社長が策定しました。彼は旧制東京第一高校時代、人生に悩み、ある時「山上の垂訓」の説教を聞いて感動し、以来、これを人生座右の銘、信条とした人物であると１９７７年１０月に新入社員研修の場で知らされて私のサラリーマン生活がスタートしました。

今回、とてもユニークなリレー講解の中からイエスの「人を裁くな。あなたがたも裁かれないようにするためである。」は、私の内で人に対して境界線を越えた批判を慎むべく対人関係の原則としても反芻されます。ある辞書には批判とは、物事に検討を加えて、判定･評価すること。また、人の言動･仕事などの誤りや欠点を指摘し、正すべきであるとして論じることとあり、批判的モノの見方は、個にとっても、集団にとっても、健全性を保持していく上で極めて大切なプロセスですが、

しかし、異質なものと向き合っている中で、時として境界線を越え、人の欠点や過失などを取り上げて責めたてることに転じることがなきにしもあらずで、はからずも責め合いの沸騰点へのトリガーになりうる境界線を見極めることの重要性と強い警鐘としても読み取れるような気がします。

果たして、私には「地の塩、世の光としての生き方探訪の旅」が、還暦を機にリセットされ、新たに始まったのだと諭してくれた第２９回の集いでした。旧友との再会、新友との出会いからも多くの恵みと励ましを頂き感涙でした。皆さん、ありがとうございました。

涙がとまらない体験

ロンドンJCFは馬場晶子姉から

素晴らしい自然の中で持たれた今年の集い、神様の臨在を感じさせる恵みに溢れたひと時でした。毎回新鮮な野菜と焼きたてのパン、日替わりの主食にお腹も満たされ、霊に満たされた3日間でした。ユーオーディア-キリストの香り溢れる音楽に魂が揺さぶられ、涙がとまらない体験をしました。聖霊様が私の心を動かし、十字架のあがないにただただ感謝の思いに満たされ、涙しました。

オランダの実行委員長松田姉をはじめ、ヨーロッパ中の多くの兄弟姉妹の御奉仕に心から感謝いたします。皆様お疲れさまでした！来年のパリでの再開を楽しみにしつつ。。。ありがとうございました。

思わず手を天にむけ

シュトゥットガルト日本語教会は
佐々木千恵子姉から

神様のお恵みでしかないすばらしいオランダでの＊キリスト者の集い＊心は励まされ感謝いたします。このためにご奉仕ししてくださった方々すべてに心より感謝いたします。ありがとうございました。

わたくしにとっては、プレ大会から讃美が私の心を力づけてくれました。思わず手を天に向けて歌いたくなるようなパワーと心が洗濯されるようなイメージでした。

私の思いを遥かに越えて

東京はユーオーディアの蜷川いづみ姉から

今回、初めて修養会に神様が参加するように導いて下さり心より感謝しています。数年前より、ユーオーディアの仲間とパリ、デュッセル、オランダ（ペートン朝子姉宅音楽会）ロンドンＪＣＦの教会で賛美コンサートを持たせて頂きましたので、懐かしい皆様とも再会出来、また新たに多くの主にある兄弟姉妹と知り合い、共に神様を賛美し、祈り、御言葉に聞き教えられ、豊かな安らぎの環境で、心身共に、リフレッシュされました。　お食事も美味しくて、ついつい沢山頂いてしまい、体重計に乗ってびっくりでしたが、今は、どうにか戻りつつあります。

パリ教会での信仰30周年を感謝してのユーオーディア・アンサンブル　チャベルコンサートもヴァカンスシーズンに入っているにもかかわらず、会場にいっぱいの人が集まって下さり、賛美とお証の祝福されたコンサートになりました。その後、主は私が救われた頃から始まった修養会に初めて参加する恵みを与えて下さり、その素晴らしさは、私の思いをはるかに越えたものであり、至福の時でした。

痛みの中にある方にも出会い祈りの課題も頂きました。それぞれのヨーロッパの地で主を礼拝し、滞在する日本人の魂の救いのために祈り　福音を生き様を通してお証されている愛する神の家族の皆様のことを、パリの地で救い上げて頂いた者として、これから、もっと身近に、祈らせて頂けることを嬉しく感謝します。主と共に歩み世の光、地の塩として、それぞれ置かれたところで喜んで仕えてまいりましょう。

来年はパリ教会主催で第 30回なので、主が導いて下さるなら是非、また参加させて頂きたく願います。ユーオーディアは7月27日に東京オペラシティーでオーケストラと合唱による（総勢100名以上）賛美の夕べ開催を予定しています。近いところでは8月24、25日　東京音楽祭ユーオーディア アンサンブル結成25周年コンサート他 、9月14、15日　京都音楽祭 （パリ教会出身のピアニスト 小堀兄も演奏されます。彼が実行委員長です。）

そして9月28日は私の泉のほとり第2作目のＣＤ完成感謝コンサートを行う予定ですので、主の御名が高らかに賛美され、神様の愛が溢れ届けられる賛美コンサートとなりますようにお祈りに是非覚えて頂けますようよろしくお願いします。

P.S. 高齢の父も元気に参加出来て喜んでいました。

主への捧げもの

オランダJCFは大島みどり姉から

いつもは遠くに住む（祈りの）友と、朝食前から静かに祈り、一緒に食事することが出来たこの幸せ！まさに、「家族」であることを実感する一瞬でした。

結局のところ、この「つどい」自体が、主への捧げものであることを、改めて知らされた思いがしました。

そして、講師の先生方や、分かち合いを共にした兄弟姉妹の口を通し、主からいただいた「みことば」によって、私は大きな慰めと励ましを得て、元気に帰宅しました。

神さま、ありがとうございます！！

皆さん、また来年も、ぜひお会いしましょう！！

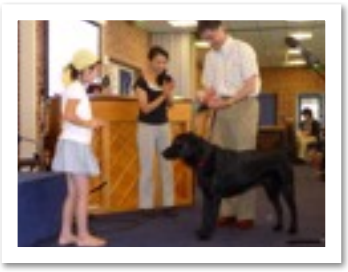
「忘れられない」

オランダJCFは大嶋邦夫兄から

さまざまな困難や悩みを抱えた多くの人たちが、フェルウェーの森に「主によって集められたこと」を実感しました。

みことばに耳を傾けていくうちに、自分の生き方が焦点が合って来、励ましと恵みを受けました。

また、集いを支える若い世代の新しいうねりが、賛美の歌声となって響き渡ることは大きな喜びでもありました。



フェルウェーの森から帰る皆の笑顔が、なんと生き生きと輝いて、素晴らしいものであったことか！忘れられません。

そのままでいい、ありのままでいい
シュトゥットガルト日本語教会は今井朗兄から

ドイツの今井朗です。2006年4月から民間企業の転勤でドイツ南部のStuttgartに駐在しています。現在、家内と二人で主にあってのみ一致して仲良く暮らしています。2010年のマドリッド集会に初めて参加させて頂き、今回は2度目の参加へと導いて下さった主に感謝します。

今回は賛美Teamに加えて頂き、楽譜も読めない／楽器も出来ない私ではありますが心から喜んで主に賛美をさせて頂きました。事前に多くの楽譜メールを頂いた時は余りにも色々な大きさのオタマジャクシの多さに驚き、“キリエ”って何？まさか“切り絵”のことかな？と思った程の音楽レベルでしたが、賛美を通して主の栄光を表す素晴らしさを体験しました。来年はパリで開催されますので、腕が疲れるほど、両手をエッフェル塔に向かって、いや、もっと上の天に向けて賛美したいと願っています。

さて、今回のテーマ「あなたがたは地の塩、世の光」を通して今後の私の信仰生活を霊的に成長させて頂く多くのメッセージを聞くことが出来ました。イエス様は、私に塩としての主に希望と信頼を置いて歩みなさい、また、神さまからすでに与えられている「光」を隣人に輝かせなさい、人を正しい道へ導くもの、こころを和ませる光になりなさいと期待されてはいます。

しかし、現実は、そのような人には到底成れない自分であり、イエス様が期待されるクリスチャン像とはかけ離れた存在であります。それでもイエス様はいつも、私をそのままでいい、ありのままでいい、そんな無価値な私をあるがままで受け入れて下さり、今置かれている場所でそのまま欠けた器のまま用いようとされている神様の哀れみを感じずにはおれません。

主が私に与えてくださった救いの体験、絶望から希望、罪からの解放、すべてが主の一方的な私への計画であり、主のみ名を崇めるみ業であることを学びました。

サラリーマンとしての一つの節目であります60歳定年を1年半後に控えて、どのように残された人生を歩むべきかの指針も示されました。65歳までどのように生活するか？経済的な不安。将来はどこに導かれているのだろうか？色々な不安や心配が脳裏をかすめがちですが、「だから、神の国とその義とを先ず、第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」マタイ６：３３

心をどこに焦点を合わせるかによって、人の計画や心配ごとは実に取るに足りないことであり、主が必ず必要なものを備えてくださることの平安と確信を得ることが出来ました。大切なのは心がどこに向いているかによって神様のみ心の占める世界へと導いてくださる恵みを感謝しています。

これからも欧州に在住されておられる方々と主にある交わりを深め、互いに励ましあい、共にみ言葉に養われて、成長して行きたく願っております。今回の集会に参加されましたお一人お一人をイエス様の愛で心から愛します。

キリスト者の集いに参加して
デュッセルドルフ日本語キリスト教会
折戸義也兄から

今年初めてキリスト者の集いに参加させていただきました。私と妻と子供２人（中学１年男、小学２年男）の家族４人での参加です。ヨーロッパ各地からクリスチャンが大勢集まるということで一体全体どんな集会なのかと興味津々でした。

デュッセルドルフから車で２時間ほどで会場に到着。緑に囲まれた場所で、木漏れ日がこぼれるとても素敵な場所でした。最初は自分たちの教会のメンバーしか知り合いがいませんでしたが、食事のたびに隣に座る方々と知り合いになり、徐々に知り合いの数が増えていき、楽しい交わりの時をもつことができました。

われわれの教会は現在無牧で、牧師先生の話を聞けるのは１カ月に１回程度なのですが、この集会ではテーマに沿って、早天、午前の集会、夕方の集会と１日に３回、先生方が念入りに準備下さった渾身のメッセージを拝聴することができ大変刺激を受け、また勉強になりました。分かち合いの時も年齢の近いメンバーで話を深めることができたのも恵まれた時でした。

子供たちは上の子は中高生のメンバーに入れてもらい、文字通り朝から晩まで、下の子はＣＳのメンバーとして先生達から温かく面倒をみていただき、行く前は少し面倒くさそうにしていた子供たちも終わった後は顔を輝かせてとても楽しかったのでまた行きたいと言っています。奉仕してくださった方々には本当に感謝です。

また、これだけの大会を支えるのにも大変な陰の奉仕があったことと思いますが、運営委員会の皆様の細やかなフォローにも本当に感謝いたします。途中参加の２泊３日でしたが、神様から豊かな恵みをたくさんいただくことができました。

団塊のあかし

ブリュッセル日本語プロテスタント教会は中山博幸兄から

素晴らしい修養会をすごさせていただき、心から神様に感謝いたします。私にとって、今回オランダでの集いは4回目の参加でした。

1回目はスイスの湖、2回目がヴィッテンベルグの城教会とルターの家、3回目がマドリッドのエスコリアル修道院、そして今回のエルスペートの森、どこも大切な思い出の場所になりました。

回を重ねると顔なじみが多くなり、再会の楽しみも増してきます。聖書の学び、賛美、交わりに恵まれた一時でした。ブリュッセルに戻り、今村さんと工藤さんのＣＤやキリスト教放送を聞き、ブリーネの阿部哲さんの伝記を読んで振り返っています。

最後になりますが、準備と当日の運営に尽力されたオランダ教会の皆様ありがとうございました。

東京・町田市は松見ヶ丘キリスト教会の大鶴正史兄から

10年ぶりのオランダ、欧州キリスト者の集い、同じ世代の交わり、数え切れない祝福を神様に感謝する数日でした。私は、シンガポールで25年前に受洗して、10数年前に駐在したオランダでJCFNのメンバーとなりました。今は、退職して、優雅？な年金リッチの生活を楽しんでます事は、神様の祝福と感謝しております。

改めて、欧州のキリスト者の喜びあふれる元気な姿に感激しました。日本の教会生活に少ない元気な明るさは必要と痛感しました。それと、お会いした各ご主人の献身的な奥様への態度は、ＨＵＳＢＡＮＤの語源は、SERVANTでないかと、、驚きました。最後に今後も欧州キリスト者の集いが、祝されますように祈ります。

オランダJCFは 大嶋邦夫兄から

集いの魅力はいろいろとありますけれども、その一つは「出会い」ではないか、と思っています。懐かしい顔との再会と同時に、新しい人との出会いは広がりを与えられたと感じました。

今回のお話のあとの分かち合いでのグループ5はなかなか充実していたと思いました。同じ世代の方々と、みことばについての話を深める、ということは日ごろあまりする機会が少ないのでとても考えさせられました。お互いに忌憚のない思いを語ることができたのはよかったです。新しい友人がふえたことに感謝しております。

パリ日本語プロテスタント教会は冨永重厚兄から

今回の夏のヨーロッパ・キリスト者の集いは各先生方の山上の垂訓からのメッセージに加えて日本からのユーオーディア・アンサンブルのコンサートと証し、そして、被災地のための祈りと賛美の夕べと内容豊かな集いでした。そして、私にとって何にも増して貴重であったのは、ほぼ同じ世代のスモールグループによる分かち合いでした。

メッセージの後、心にしめされたことや疑問に思ったことを中心として、各地から参加しておられる、普段は接触できない信仰を同じくする兄弟達と分かち合えるこの時は、正にこの集いの大いなる恵みです。合計４回持たれましたが、もっと時間があったらなと思わされました。オランダの兄弟姉妹方の祈りと尊いご奉仕によって今回も祝福と恵みに満ちた集いが持てました事を心から感謝致します。

ノルウエーはブリーネ祈りの家の森功兄から

集いでは良いお交わりとグループでの分かち合いを有難うございました。分かち合いでは主が導いて下さり、皆さまの体験や経験、そして、感想等聞かせて頂いて本当に感謝でした。

集いでは先生方のお話ももちろんですが、こうした交わりや分かち合いの時が持てる事、そして新たに知り合いとなる事も恵みの一つです。

先日は中山さんからブリュッセルの花のじゅうたん写真を送って頂いたところです。素晴らしいものですね。実物を観ようと家内と話しています。

多様性を愛する神

浜島　敏兄から

今年も、キリスト者の集いに参加できたのは大変幸せでした。暑い日本から一時離れて，涼しいオランダで過ごせたこと自体が幸せでしたが、山上の垂訓からたくさんのメッセージをいただきました。今回私が考えさせられたのは、内村先生の「神様は、多様性を愛される」（このままの言葉であったかどうかは憶えていません）という言葉でした。

分かち合いの時にも問題になりましたが、教会の一致という場合に、どうしても、同じことを考え、同じ行動を取ることが一致だと考えてしまいがちです。牧師に右にならえというのがいかにも良い信徒のように思われがちですが、そう ではないのではないかということです。

ヨーロッパに住んでいると、毎日が「多様性の中」に生きると言うことですが、異質なものをはじき出すという文化を持った日本人にはすぐに思いつかない言葉でした。目が足であってはならないし、その逆もだめだということでしょう。分かち合いでは、「一致」という言葉ではなく、「調和」（ハーモニー）が良いのではないかと言うことになりました。それぞれの個性を生かして、調和を取りながら，一つの目標のために一つとなるということでしょうか。足は足として、口は口として、主のために用いられるということで一致ができるのだと言うことを改めて考えさせられました。

カリスマティックに流されていきそうな今日の日本の教会の中にあって、いかに自分を保ち、しかしいかに協調するかということが、今後の日本宣教のためにも考えていかなければならない課題ではないかと思わされました。ありがとうございました。

それから、前にも書いたと思いますが、分かち合いの時間は、大変恵まれ、親しい仲間ができるのは大変ありがたいですが、日本から年に一度だけの参加ですと、むしろ、いろいろな人たちとの交わりを喜びたいという気持ちが強く、もう少し自由に交わる時間がほしいように思われました。なんらかの工夫がないでしょうか。少人数の話し合いには気が重いという人もいます。それこそプログラムにもなんらかの多様性を持つことはできないでしょうか。

今日、これからインドに行ってきます。みなさんお元気で。

教え子とともに

バルセロナ日本語で聖書を読む会の下山由紀子姉から

今回は娘と二人だけで参加予定でしたが、横浜の母教会から直前に参加できることになった姉妹を迎え、とても恵まれた4日間を共に過ごすことができました。

彼女はかつて私が日曜学校の奉仕をしていた頃に受け持ちの生徒だった子で、今は親しい信仰の友。彼女に突然時間ができたところへブルーベルの会の方がご尽力くださり、オランダの主催者皆さんのご協力をもって開催3日前に参加可能となったことは実に驚きでした。

彼女にとっても恵み多い集いだったようで、神様と主催者の皆様そして、いつでも協力を惜しまない信仰の友に心から感謝しています。本当に有難うございました！

楽しい４日間にして下さった神様

バルセロナ日本語で聖書を読む会の下山泉紀さん（中高生科）から

一年で最も楽しみにしている4日間がまた終わってしまいました。今年の主催地はオランダという暑い国出身の私にとって嬉しい北欧の涼しい国でした。

事前に今年はCSが4名だけと聞いていたのでじゃあ中高科も少ないかな？と思っていましたが、昨年より多くて驚きました。一国に限らずヨーロッパ各国、そして日本からの参加もあり、それぞれの国の文化や表現の仕方など、ヨーロッパキリスト者の集いならではの楽しみ方が今年もまたできたと思います。

私も中高科三度目の参加となり、そろそろ年下の方が多くなってきて少し寂しいなと思いましたが、厳しい上下関係や年下から敬語を使われるなどという規則は全く存在せず、寂しいなどと感じていた私が馬鹿らしく思えるほどみんなと一体になって楽しめました。来年受験を控え参加が難しい私ですが、可能なら是非参加したいです。

最後に、私達の為にプログラムを作り、日本語の苦手な人に通訳をしてくださった中高科奉仕者の方々、メッセージを考え神様のことを考える時間を与えてくれた牧師、伝道者の方々、そして今年もまた楽しい4日間にしてくださった神様に感謝します。

ここも神の御国なれば

日本バプテスト船橋教会は横尾共子姉から

昨年夏にオランダから日本へ帰国しましたが、丁度１年後にそのオランダで「キリスト者の集い」へ参加できたことは神様からの特別なプレゼントでした。

懐かしい方々との再会、私たちの帰国後に誕生した赤ちゃんとの初対面の願いも叶いました。集いの準備が本格的に始まる頃に帰国したことで、大変な部分のお手伝いをする事が出来ませんでしたが、集いの間、僅かではありますがオランダの兄弟姉妹と協力して、一緒にできることがあったこと、大変嬉しい事でした。

申し込みの案内が来た時、夫は仕事で参加できないとの事だったので、「今回の集いへの参加は難しいかなあ。。」と思っていましたが、在欧日本人宣教会の家庭集会でお会いした姉妹から、「一緒にいきませんか？」と声をかけていただき、夫に相談してみたところ快く送り出してくれました。ご一緒する姉妹も当初は１人の予定でしたが、２人、３人と増えて、最終的に６名で参加できたことは、本当に恵みでした。

今回の集いでは、かつて育んでいただいたオランダでの交わりと、今置かれている日本での交わりが、私の中で一つになったように感じました。

「被災地のための祈りと讃美の夕べ」では、お一人お一人の顔を見ながら、世界の各地の方々がこの地に集い、あらゆる楽器の音や歌声が美しいハーモニーとなっているのを聞いていたら、なんだか涙が溢れてきました。「ここも神の御国なれば」という讃美も歌われましたが、まさに天国の味わいのように感じました。

いつか持たれる天の国での大合唱は、さらに多種多様な人々が、一つになって神様を讃美するのかと思うと、心が震えます。ひとり、ひとりは、ちいさな塩粒、ちいさな光かもしれませんが、それぞれが地の塩、世の光とされている喜びと、最後には、また神のみもとに相集うことのできる喜びを思った集いでした。感謝いたします。

みんなちがって、みんないい

オスロJCFは金子進兄から

私にとってヨーロッパ・キリスト者の集いは慰めの時である。集いに出席し、数日間の共同生活は日本人キリスト者であることの再確認の場でもある。日本語が中心でほとんどが日本人である。

しかし、この集会にはすばらしい特徴がある。参加者の個々人の信仰背景が面白いように異なっている。日本で神様に出会った者、学生として、技術者として、派遣社員として、または結婚相手としてヨーロッパに来て神と出会った方もいる。その中には短期駐在や永住している方、卒業したら帰国する青年たちと様々である。

老若男女の年齢にも大差がある。しかし、不思議なことに朝、笑顔でお早うございます、と声をかけ、声をかけられると、もう家族になっているのである。おじさん、おばさんと甥や姪の関係を感じてしまうほど心がなごやかに開けてくる。自由時間の会話は日本語であるが、10数ヶ国語を話す国々から集まっている。それぞれの国の言語、生活、風土のちがいを乗り越えて和合している。

神様との出会いの時も、場所も、年齢も、性格も、そして現在にいたるまでの過程もみな違う。「みんなちがって、みんないい」と神様が微笑んでおられるような気がする。集いの基盤は日本語社会であり、クリスチャンであることだけである。ただ、それだけで強く、楽しく、美しくつながっている。普段はあまり気がつかない神による奇跡である。

今回も楽しい、新しい出会いがたくさんありました。あれもこれも素晴らしい出会いでした。「キリストによる救い」によってつながっている兄弟姉妹であることを再確認できたことを感謝しています。

見よ、兄弟が和合して共におるのは、いかに麗しく楽しいことであろう。 詩篇133：1

説教をとおし、祈りをとおし、交わりをとおして得られた恵みと祝福の数々は、参加したすべての方々の信仰の糧として、これからも長く胸の奥で存在し続けるでしょう。このような機会を与えてくださった主催者のオランダ教会の方々に心から感謝します。本当にご苦労さまでした。次回はパリですね。今から待ち遠しく期待しています。

今回は実行委員として

オランダ日本語キリスト教会は榊原順子姉から

これまで大いなる恵みを受け、お世話になり続けてきた「ヨーロッパ・キリスト者の集い」で、主催教会の実行委員として奉仕をさせていただけて、感謝しています。

開催期間中は、全体を見渡して目と気を配っていなければと思い、いつでもどこにでも飛び出して行けるような心づもりでいましたが、周りにおられる兄弟姉妹方がいつも助けて下さって、波に乗って運ばれていくように集いが順調に進行し、分かち合いのグループにも、賛美チームにも参加することができました。

大きな事故も、病人もなく、雨の予報だったお天気まで神様が素晴らしいお天気にして下さって、皆さんが恵みに満たされて帰って行かれたのを見て、心から神様に感謝し、御名を崇めます。また来年、お会いしましょう！

主から与えられた時間

ロンドンJCFは馬場茂信兄から

2011年、英国での修養会から早一年が経過しました。昨年は奉仕をする側として大会中もまた大会準備に費やした一年以上の歳月も、思えば一番支えてくれたのはそばにいた妻とお腹にいた娘でした。

昨年の「仕事をしにいった」という記憶しかないほど忙しかった修養会にくらべ、今年は妻と娘とゆっくりと参加し、肉体的にも霊的にも充電する機会を頂きました。素晴らしい環境の中で自分のペースで人生、家族、そしてイエス・キリストと向き合う。今の私に一番必要だった時間を主は、ヨーロッパ・キリスト者の集いを通して与えて下さいました。ハレルヤ

この素晴らしい信徒集会と阿部哲兄

ロンドンJCFは馬場信裕兄から

2012年のオランダ教会担当のヨ-ロッパ・キリスト者の集いに感謝と賛美をもって参加することができました。
今回日本から著者野口和子女史による『この愛に捉えられてー信徒伝道者・安部哲と霊満クルセード』が紹介されました。

ヨーロッパにはなんとすばらしい日本人信徒集会があるのでしょう。日本のリバイバルは信徒伝道者クリスチャンが増えなければおこりません。ヨーロッパの日本人集会は教派の垣根を越えた信徒の集まりです。

ロンドンJCFの盛永名誉牧師を通じて安部哲兄のことを断片的に存知あげていました。この度この著書により安部哲兄の壮絶な信徒伝道の全容をしることができたことを感謝しています。ヨ-ロッパ各地の集会で安部哲兄のことを良く存知あげているかたがまだ沢山いらっしゃることも知ることができました。

安部哲兄は信徒伝道者でした。ヨ-ロッパ・キリスト者の集いは安部哲兄が提唱者ではなかったけれど、実質的な基盤を作った方です。ヨ-ロッパ・キリスト者の集いは信徒集会なので牧師宣教師は発起人に加わっていません。安部哲兄はゲストスピ-カ-として証しや奨励を語ったとあります。

27回スペイン集会はなんと3名の信徒（その内1名は開催前急遽帰国）でしたが各地集会の奉仕応援で開催でき、人数が少なくとも開催できる証の大会になりました。
29年間一度も途切れることなく、この信徒集会が続けてこられたことを神に感謝いたします。来年のパリ教会担当で30回を数え記念すべき集会になります。いまから準備して来年に備えてまいりましょう。

開催を担当した各集会には教派の異なる兄弟姉妹が時には、意見がぶつかりあいますが国をはなれた日本人クリスチャンとして「主は1つ、信仰は１つ、バプテスマは1つです。」として協力し、開催準備をしています。

オランダ教会で奉仕を担当していただいた皆様ほんとうにご苦労さまでした、そしてありがとうございました。感謝いたします。このすばらしい日本人信徒集会の基を作られた安部哲兄にも感謝いたします。私自身の自戒を含めヨーロッパから一人でも多くの信徒伝道者が起こされることを願っています。

今回の集いで私が学んだこと

ミュンヘン日本語キリスト教会は
安藤みずきさん(中高生科）から

私にとって今年のヨーロッパ・キリスト者の集いの参加は13回目となりました。３歳の時が初めてで、何と今回はその時と同じ場所だったのです！それから私はずっと、毎年行われるこの修養会を一年の中でも大きな楽しみとしていました。

今年の中高科には、初めて参加した人が多く、自己紹介を何回もしました。びっくりしたのは、4年前にも一度参加したことのあった男の子が、今年も来ていたことで、再会した時にはなんだか懐かしかったです。初めてキリスト教に触れた人もいたのに、すぐにみんなが仲良くなれたことが本当に嬉しかったです。プログラム以外の時にも中高科のメンバーで集まって、バレーボールをしたり、夜は怪談話をしたりして絶えず盛り上がっていました。

今回の集いで私が学んだことは、いつでも祈ることの大切さと、賛美をすることの素晴らしさです。私は賛美リードをするチームに入らせて頂いて、曲の振り付けを考えたり、大声で歌ったりしていて、ものすごく楽しかったし、みんなも賛美をすることを楽しんでもらえたらいいなと思っていました。
初めて来た人も、たくさん学ぶことができたと思います。そして来年また行きたいって言ってくれたことは本当に嬉しかったし、この機会を与えて下さった神様に感謝したいです。

証を出前する

東京は野村和子姉から

第29回ヨーロッパ・キリスト者の集いに参加できた恵みを感謝いたします。

集会場の豊かな自然環境、いただいた霊の糧の豊かさ、初対面の方々と旧知のようにしてお交わりできたこと。裏方として奉仕なさっていた兄姉たちの姿・・・。初参加して、感謝したいことがいくつもありました。

この集会の礎となられた故・安部哲兄（1989年にオランダ南部で召天）の伝記『この愛に捉えられて』を日本から持参し、皆様にご購入いただき、収益を集会運営におささげできたことも感謝いたします。会場で、本書執筆のために多大なご協力を下さった兄姉たちとも6年半ぶりに再会できました。

安部兄は「全能の神により頼むんじゃ」が口癖で、信徒の伝道使命を語り続け、自ら最後まで実践し続けました。オランダ南部集会の姉妹たちは、８０キロもの道を車で出かけて「出前集会」を続けているとのこと。安部兄の伝道スピリットが今も継承されているのを知って励まされました。

そのように喜んで仕える姿勢は、この集会運営全般にうかがえました。集会のビデオを拝見し、この集会が賛美に始まり、賛美の中に住まわれるご聖霊に導かれて進められていったことに気がつきました。喜んで仕える原動力はそこにあったのでしょう。

これまでの私は、引きこもって原稿を書く日々でしたが、帰国後「証しを出前する」という新たな役目に導かれているのを感じました。聞き手が１人でもいたら証しに出ていった安部兄と、この集会を支えてこられた皆さんに習って、そして「良き力に守られつつ」一歩踏み出そうと思います。

『この愛に捉えられて
信徒伝道者・安部哲と霊満クルセード』

野口和子著

信徒伝道者・安部哲兄(1913－1989、初生雛雌雄鑑別師)は、1960年代の共産圏伝道を皮切りに世界53か国で伝道しました。神以外の何ものも恐れないその働きの原動力は、ただただ彼のために死んでよみがえってくださったイエス様の愛でした。

1980年代の在欧日本人伝道でも、安部兄は草分けの一人として、信徒による伝道の大切さを証ししてきました。本書に記された在外日本人教会の成り立ちから、日本の教会の壁を破るヒントを学び取ることができると思います。

2011年3月11日以来、人々は、イエス様のみが与えることのできるいやしと再起の力を求めています。安部兄の伝道実践を貫く霊的原則が、体験を踏まえて具体的に記された本書を通して、一人ひとりが霊に燃え､主に仕えることを期待します。

（イーグレープ刊　Ａ５判　４５０頁　定価２､０００円）

地の塩としての役目を果たしていきたい

シュトゥットガルト日本語教会は
今井 弥寿子姉から

今回の第29回ヨーロッパ・キリスト者の集いは、私にとって2回目の集い参加でした。初参加は2010年のマドリッド。今回はオランダの豊かな自然に囲まれた施設で野うさぎが遊ぶのを見ながら居心地の良いお部屋でゆっくりくつろぎ、体にやさしい食事を満喫。なにより豊かな霊の糧を毎日いただいて、霊も心も体もリフレッシュされた恵みの時間でした。

3泊4日間の講話、早天祈祷会、礼拝で、山上の垂訓から先生方を通してみことばを学び、またスモールグループで分かち合うことができたこと、本当に感謝でした。

「あなたがたは地の塩、世の光」です と神様が一方的に私を選んでくださったこと。その役目を今おかれている場所で果たすこと。それを神様が私に期待しておられることを学び、私の資質や能力にとらわれないで、日々イエス様を信頼して聖霊の導きと助けを受けながら歩んでいきたいと思います。

また、祈りのセミナーに参加し、神様にしゃべってばかりで聞くことを忘れているのが私の祈りとわかり、聞く姿勢を身に着けたいと思いました。

これからは、神様の声を聞けるよう交わりを第一にできますように、毎日聖霊の導きと助けを祈りつつ「地の塩、世の光」の役目を果たすものとなりますようにと願います。

スモールグループの時間や食事の時には、各地に散らされている方々と話すことができ、それぞれ違った環境の中にいるけれど、イエス様によって一つとされていることを感じました。いつも会うことはできないけれど祈りあえること、あちこちに同じような思いで主とともに歩んでおられる方々がおられると思うと勇気と力が与えられました。主の家族との交わりは最高ですね！

日常生活がいつの間にかマンネリ化してしまってそれにさえ気づかない、そんな時に神様が集いに導いてくださり、閉じそうになっていた眼を開いてくださったような気がします。今神様がおいてくださっているこのStuttgartで神様が与えてくださった同労者と一緒に「地の塩、世の光」としての役目を果たしていきたいです。

長い間準備をして暖かく迎えてくださったオランダの教会の方々、スタッフの皆さまに心から感謝します。ありがとうございました。

「賛美の夕べ」に参加して

スイス日本語福音キリスト教会は
今村葉子姉から

この集会の直前まで日本へ帰省しており、大きなトランクを自宅に置き、荷物を小さめのトランクへ詰め替え、慌ててオランダの地へ向かいました。

日本滞在中より気にかかっていましたのは「賛美の夕べ」で賛美する事になっていたバッハのロ短調ミサ曲キリエ・エレイソンの事でした。歌詞は「キリエ・エレイソン」（主よ、憐れみたまえ）ただ一言。しかし、この言葉のなんと深いことか、、。偉大なバッハの作曲、あまりの転調の多さに音を覚える事もできず、また日本では体調不良だった事の他に、日頃関わる事の出来ない日本の家族への時間を優先してしまったので、全く譜読みもままならず、「賛美に対して時間を裂く事のできない者が賛美者としてご奉仕していいのか？」と自問自答していました。

しかしその一方、自分の心の奥ではキリエ・エレイソン（主よ憐れんで下さい）はまさに私の魂の訴えでもあったので、許されるのなら賛美させて頂きたいという願いも強く、心の中はこの二つの思いにせめぎ合っていました。しかし集会で練習が始まるや否や全ての思い煩いは静まり、ただただ素晴らしい賛美曲に没頭する毎日でした。

キリエ・エレイソンの他には、私の大好きな「善き力に守られて」がプログラムの中にありましたが、この曲は現地教会でよく賛美されており、私はドイツ語で賛美していました。けれどもこの度はこの曲を日本語で歌う事となり、母国語なので直接魂に伝わってくるのでしょう、練習の時から泣けてしまって、「やばい！音程がとれない！」と気を引き締めながら、しかし、３番の歌詞「たとい主から差し出される杯は苦くとも恐れず感謝を込めて愛する手から受けよう」に至っては堪えきれず、本番もメロメロになってしまいました。

この賛美曲の歌詞は、ボンヘッファー氏が処刑されるその年のクリスマスに婚約者とその家族に宛ててお作りになられたと聞きましたが、この歌詞通り信仰のうちに愛する神の御手からご自分の杯をお受けになられた師の魂は私には計り知れないです。しかし私も愛する家族に「善き力に守られつつ、来るべき時を待とう。夜も昼もいつも神は我らとともにいます。」と心から伝える事の出来る平安と信頼を主に頂きたいと心から思いました。

この春に、何気なくある姉妹が私に「賛美は心を上へ、神へ向かわせます。たくさん賛美して下さいね。」と言葉をかけて下さいましたが、賛美の深みに導かれる時を与えられました。この偉大な賛美のプログラムを整えて下さった神様と誠実にお仕え下さったスタッフのお一人お一人に心より感謝致します。

オランダの兄弟姉妹をはじめ、神様の御手の中のすばらしい真珠であられる皆様へ

ドイツはダルムシュタット・マリア姉妹会の
Schwester Soharaから

一度にこんなにたくさんの日本人の兄弟姉妹と出会い、一緒に御言葉を聴き、主を賛美させていただくのは、35年前ドイツに来てから初めてのことでした。

マリア福音姉妹会というドイツのプロテスタントの共同体に入ってから、神様は私がそれまで知らずにいたいろんなことを教えてくださいましたが、その中のひとつは日本がアジアの諸国をはじめ、オランダ、イギリス、アメリカ、オーストラリアなどの多くの国の人々に対して、どんなことをしてきたかという事実、真実の謝罪と償いがあまりにもなされていないという事実でした。

「私は日本人です」と自己紹介をすることを恥ずかしく思った時期もありました。しかし真実なる神様は、私自身のまことの姿、傲慢とプライドに満ち、同じ日本人を裁いている私の醜い罪の姿をはっきりと示してくださり、深い悔い改めへ導いてくださったのです。

その時から、イエス様が十字架上で成し遂げてくださった永遠の贖いの意味を、いくらか心でつかむことができるようになり、このお方に愛と感謝、すべての栄光を捧げずにはいられなくなりました。同時に自分の祖国に対する、まことの愛と感謝する心も主は与えてくださいました。

そして今回、イエス様を心から愛する、主にある多くの兄弟姉妹と出会うことを許され、主がそれぞれを通してこのヨーロッパの地でしてくださっていることを知り、イエス様は私たち日本人を何と愛してくださっているのだろう！日本の兄弟姉妹は何とすばらしい人々だろう、と思わずにはいられませんでした。

このすばらしい御業を始めてくださったお方は、この集いを通して、これから先、もっとすばらしいことをなしてくださると確信し、心から天のお父様と主イエス様、御霊の神様にすべての栄光を帰します。

２０１２年の集いに参加して

パリ日本語プロテスタント教会は
作田銀也兄から

今年も、身障者の家内と共にキリスト者の集いへの参加が許されたことを心から主に感謝いたします。素晴らしい企画で担当されたオランダの実行委員の皆様、及び献身的に奉仕をされたメンバーのお一人おひとりに感謝するとともに、主の御祝福が豊かにありますようお祈りいたします。

講演を通して奉仕された教職の先生方、賛美を通して主をたたえた賛美チームの皆様、そして何よりもこの集いに参加された方々のすべてが霊的養いをいただき、感謝と共に集いの会場を後にしたことでしょう。

個々には反省材料もあるかと思いますが、次のステップのために必要なことであったかもしれません。個人的には私は賛美チームに参加させていただきましたが、最後まで譜面から目を離すことができず、後でビデオを見て、一体どこに向かって賛美しているのかと反省しました。神様に向かわず楽譜に向かっているのです。（リーダーの篤子さん、ごめんなさい）

普段、接することのできない先生方の講演を聞くことは私たちにとって大きな喜びです。正しい聖書理解に基き、良く準備された深いみ言葉の説きあかしは私たちの心に霊的癒しを与えてくれます。CS、中高科においても同じと思います。

今年も代表者会議において、この集いが信徒大会であることが確認されました。その意味において、今回信徒の証しの機会がなかったことは残念です。個々にはスモールグループや交わりを通してなされたことでしょう。来年の第３０回担当教会として重い責任を感じさせられています。

「御国の思い」

ロンドンJCFは清水勝俊兄から

今年も年に一度のヨーロッパ在住日本人クリスチャンが集う「欧州キリスト者の集い」に参加しました。これで個人的には３回目の参加になりますが、久しぶりにお会いする兄弟姉妹とのお交わりやすばらしい先生方のメッセージをいただき、霊肉ともに豊かに養われた４泊５日の修養会でした。今年はオランダで開催され、森に囲まれた静かなすばらしい環境の中、「地の塩、世の光」として生きることをテーマに主に山上の垂訓からみことばをいただき、みなで主を賛美し、祈り、まさに神の御国を思わせる主にあるすばらしいひと時でした。

遠く本国を離れ、なかなか普段日本語でのみことばの深い養いやお交わりが限られている中、このような修養会が与えられていることは、本当に神様のすばらしい恵みです。やはり、私たちには、魂に響くことばで、心からの交わりを持ち、賛美を捧げ、祈り、また、みことばによって主の特別なお取り扱いをいただき、養われることはこの上ない贅沢な時間です。

今回もともにこの地に置かれた信仰の諸先輩、兄弟姉妹との交わりを持ち、互いにお証をし、祈り、励まし合い、未信者の方にも伝え、また、賛美あふれる礼拝をお捧げし、個人的にもこれからの歩みを示されるすばらしいメッセージも与えられ、恵みにあふれる時でした。

今回で２９回目を数え、いよいよ来年は、フランスで３０周年の記念大会となります。今でこそ、グローバルに情報や交通が自由になっていますが、３０年前、当時まだ日本人も少なかったこのヨーロッパの地で、母国語で修養会を持ちたいと始められた方々の思いはいかばかりだったことでしょう。

この日本人有志の思いは、脈々と受け継がれ、今なお、輝きをもって大きな働きとなって続いています。どうか、この燈された信仰の灯火が、絶えることなく、ますますの輝きをもって大きく増え広げられんことを、このヨーロッパの地においても、一人でも多くの日本人の同胞がイエス様の福音に触れ、救われる者が起こされ、さらに宣べ伝えられんことを祈り、この地を受け継ぐ者として、主の教会を建て上げ、御国のために労していきたいと願っています。

「集い実行委員として振り返って」

オランダ中部集会は松田信子姉から

第２９回目を迎えるこのキリスト者の集いが、開催地オランダで大きな恵みのうちに終えることができたことを神さまにとても感謝しています。また何よりも、祈りによって支えて下さったおひとり一人、参加して下さったおひとり一人、そして奉仕下さったおひとり一人に対する感謝の気持ちは言葉で十分に言い表しきれません。皆さま、改めて本当にありがとうございました。

この集いを準備段階から振り返る時、実はこれほどに複雑な心境の中で、これほどの大役を任された事は、私の人生の中で最も稀なことの一つであり、また最も大きな試練（これを試練と呼ぶのにふさわしいのであれば）の一つであったかもしれません。今から３年前の２００９年５月、教会の臨時総会でオランダＪＣＦが２０１２年のキリスト者の集いの主催教会となることが可決されましたが、私は祈りつつ臨んだこの議決で不賛成の意を示しました。現在の教会の状態が必ずしもこのように大きな大会の主催を引受けて良い状態ではなく引受けることは無責任ではないか、と私には思われたからでした。

この事が可決され複雑な心境にありましたが、この事実を受け止めようとしている最中私を更なる複雑な心境にさせたのは、この集いの実行委員の一人として私が推薦され検討を求められた事でした。どのように答えてよいのかわからず、ただ神さまに祈りました。祈りを通して次第に私はこの事実を別の方向から見るようになりました。すなわち、この決議がなされた以上事実を真摯に受け止め、それに対して私はどうするべきかが問われているように感じました。教会の現状態にではなく、集いがこの地で開催されるという現実に焦点を当てると、この集いに参加されるひとり一人のことを思わせられました。そしてその思いはこの集いのために、準備のために喜んで奉仕をさせて頂きたいという思いに変わりました。実行委員には私を含めて５名が選ばれ、２０１０年３月末、初回の実行委員会が開かれ、集いに向けての準備が本格的に始まりました。

準備が始まってからは、いくつかの難関がありました。５名で発足した実行委員会でしたが、そのうちの３名がやむを得ない事情により辞退しなければならなくなり、実行委員は正式には２名、事実上の奉仕者を含め３名となりました。その中で私は必然的にリーダシップをとって準備を進めなければならなくなりました。全てが初めての経験であり、全てにおいて慎重かつ思慮深く考え進めていくことが必要とされました。また、集いの参加申込数が施設との予約最低数を遥かに下回るという事態が起った時、施設との支払いプランを目前に襲いかかるような不安と孤独の中に一人置き去りにされたように感じたこともありました。けれどこのような難しさ一つ一つの中で、心の奥深くで神さまを信頼する一筋の気持ちを頼りに助けを求め祈る時、神さまは兄弟姉妹の助言を通して、また夫の助言を通して、そして冷静に考え進められるよう私自身の器を整えて下さることを通して、いつも最善の時を与えて下さり、いつも最善の対策へと導いて下さいました。これらの事情を知った多くの方々がこのために心から祈って下さったことは、私にとって大変大きな支えとなりました。

準備の中ではまた困難以上に多くの恵みがありました。実行委員会は顔を合わせてのミーティングが１３回、そしてスカイプ、それ以外に数え切れないほどのメールのやり取りで業務を進めることになりましたが、準備がスムーズに進んだのは、もっぱら同実行委員の榊原姉、そして大島兄がいつも忠実に、そして明確かつ敏速に応対して下さったからでした。また、準備が具体的に進むにつれオランダＪＣＦの多くの有志が、それぞれの奉仕を忠実に担って下さり、それは本当に大きな奉仕の力となりました。今までの集いもそうだと思いますが、実行委員会によってつくられる下地があり、そしてそれを基とする全ての奉仕者と参加者によって、初めてこの集いが「集い」として築かれ、整えられたものとなることを感じずにはいられませんでした。

目に見えるかたちで大きな、また小さな奉仕下をして下さった方々、目に見えないかたちで大きな、また小さな奉仕を下さった方々…　神さまの目にはそれら全ての方々が等しく高価です。まさしく私たち一人ひとりがそれぞれのありのままの姿で「地の塩、世の光」としてこの集いに集められたように私には思われました。

２年前、義母の所属するアマチュア劇団の記念講演で私はカーテンの開閉役を任されました。観客の前に決して姿を現すことのない地味なカーテン役ですが、各場面の始まりと終わりには大変重要で欠かすことができません。この役を体験して以来、集いの準備中いつもこのカーテン役が心から離れませんでした。「集い」の本番を前に、私はこのカーテン役のように奉仕に臨ませて頂きたいと願っていましたが、「集い」の一部始終のカーテンの開け閉めは、実は、全て神さまによってなされたことを確信せずにはいられません。